

立教大学コミュニティ福祉研究所学術研究推進資金企画研究プロジェクトⅠ（教員・学生参加型） 2024年度研究成果報告書

プロジェクト 学生代表者	学科・学年	氏 名
	スポーツウエルネス学科・3年	福田ひな乃
指導教員	所属・職名	氏 名
	スポーツウエルネス学科・教授	松尾哲矢
研究課題	中山間地域の子どもから日本を元気に ～耕作放棄地を活用した「TOSACHO SPES プレーパーク」創りを通して～	
研究年度	2024年度	
プロジェクト 分担者	大谷清仁、伊藤晴海、門脇啓太、富岡右京、牛久保美良 宇山友貴、増淵団、安蒜由捺、斉藤由惟	

プロジェクトの内容及び成果の概要

私たちは、「社会課題×スポーツ」という視点から先行研究の検討や文献調査を行う中で、日本の中山間地域には子どもの運動の選択肢の少なさや、耕作放棄地の増加等の課題があるという知見を得た。そこで得られた知見についての具体的な現状の把握やその解決策の検討を目的とし、高知県土佐郡土佐町に赴いた。また、今回のプロジェクトにおける具体的な研究成果としては、調査結果を踏まえて、**Sport Policy for Japan 2024**で「中山間地域の子どもから日本を元気にを～耕作放棄地を活用した『TOSACHO SPES プレーパーク』創りを通して～」というタイトルで政策提言を行い、優秀賞を受賞した。

現地での調査活動では、先行研究の検討によって得られた知見についてのリアルな実態を確認することができた。また、土佐町におけるいくつかの団体へのインタビュー調査により、各団体のリアルな活動内容に触れることもできた。今回のインタビュー調査は、地域のスポーツコミッションや高校の魅力化に取り組む団体、土佐町 **Happiness** スポーツクラブなどを対象に行った。この調査から、それぞれの団体が行なっている地域の課題解決に向けた取り組みとその課題が明らかになった。具体的な取り組みとしては、地域唯一の高校である嶺北高校の生徒たちが「探究活動」というプログラムを通じて主体的に地域づくりに取り組んでおり、地域への愛着や関心が高まるきっかけづくりのサポートをしていることなどが挙げられる。一方で、中山間地域ならではの人口減少やコミュニティの縮小などにまつわる課題も看取された。具体的には、土佐町における土地の所有者が減少していることから、土地の管理の難しさや不安が出てきていること、さらにはスポーツの現場においても、町のスポーツ環境を支えている土佐町 **Happiness** スポーツクラブでは指導者不足や実施場所が限られてしまうということなどである。特にこのスポーツの場においては、子どもたちが実施したいスポーツが十分にできなくなっている現状が見られた。

これらの現状を踏まえて私たちは、土地の所有者やそれを管理できる人が減り使われなくなってしまった土地、つまり耕作放棄地を新たな方法で活用し、子どもたちが十分にスポーツ活動できる場を創ろうと考えた。また、これまでの調査でも明らかになっているように、大人が提供できる範囲での選択肢から選ぶという形でのスポーツ参画であったことが、子どもたちのスポーツの選択肢を狭めることに繋がっていたと考えたことから、子どもたちが自由にスポーツの場を創っていく、という新たな視点を取り入れながら、施策を検討することにした。その際、場所のモデルとして着目したのが「プレーパーク」だ。プレーパークは、運動遊びを通じて子どもの創造力や自主性を育むことができる点が大きな特徴となっている。しかし、プレーパークへ赴いた実地調査から、ここでも子どもたちは、大人に与えられた環境の中でしか活動できていないという同じ課題を感じるようになった。

以上のことから、私たちは、具体的な施策として、プレーパークが持つ子どもの自主性を育むといった良さを残しながらも、子どもたちが運動遊びをする場所を「創る」段階から関わるができる「スポーツプレーパーク創り」を提案することにした。

この施策を通して得られる効果については以下のものが挙げられる。①プレーパーク創りに子どもたちが中心となって関わり自分たちがやりたいスポーツを提案することで、子どもたちの運動の選択肢を増やすことに繋げられる。②耕作放棄地を活用したプレーパーク創りにより、不要な土地を有効活用することができる。③プレーパーク創りを通して地域の子どもたちや住民が集まり、共に考え、創り、遊ぶことで、地域内の絆が深まると同時に、地域全体の活性化に繋がり、地域住民が地域に対する愛着を育むことにも寄与する。この施策を形にすることによって、地域住民にとってリラックスできる「サードプレイス」としての役割を持たせることも期待できる。将来的には、このような場所が地域の持続可能な発展に寄与し、中山間地域が抱える課題解決の一助となることを祈っている。

今回の調査を通じて土佐町の関係者の方々とも意見交換をさせていただく機会もあったため、この調査を提言で終わらせず、引き続き、課題解決に向けて取り組んでいきたい。